今夏の甲子園は、海の向こうからやってくる。
アメリカを拠点に活躍する若き女性監督が見つめた、夢と汗と涙の物語。

『甲子園：フィールド・オブ・ドリームス』

ニューヨークで映像制作者として活躍中の 島根・出雲出身 佐藤文郎氏が ポストプロダクション・スーパーバイザーとして参加!!

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶びいたします。
日本の夏の風物詩ともいえる国民行事「夏の甲子園」。毎年日本全土を熱狂の渦に巻き込む全国高校野球選手権大会ですが、今年は新型コロナウィルスの影響を受け、第１０２回を迎える本大会の中止が決定し、１００年以上続く歴史の中で史上３度目、戦後としては初めてとなる高校野球界にとっても異例の年となりました。そのような年に劇場公開が決定した**『甲子園：フィールド・オブ・ドリームス』**は、「高校野球という日本独自の文化を海外に紹介したい」という監督と制作陣の願いから日米の国際共同制作作品として誕生しました。海外に先駆け放送され大きな反響を呼んだNHKのドキュメンタリー「ノーナレ 遥かなる甲子園」(18)、「HOME 我が愛しの甲子園」(19)で描ききることができなかった部分まで被写体を掘り下げ、余すとこなく高校野球の魅力を詰めた長編作品です。ニューヨークを拠点に活躍する**若き女性映像作家・山崎エマ**が監督を務め、米・撮影クルーとともに**１００回記念大会**へ挑む**激戦区神奈川県の雄・横浜隼人高校**と、**大谷翔平や菊池雄星を輩出した岩手県・花巻東高校**の球児とその指導者へ１年間に渡る長期取材を敢行。2019 年 11 月**アメリカ最高峰のドキュメンタリー映画祭「DOC NYC」でワールドプレミア上映**、さらに 2020 年６月**アメリカ最大級のスポーツ専門チャンネル「ESPN」にて全米放送**されると、日本人メジャーリーガーたちの“原点”を描いた作品として、また高校野球を“日本社会の縮図”と位置づけ変わりゆく時代の空気をも切り取る山崎エマ監督ならではの視点とその手腕に、野球大国であるアメリカ全土で高い関心と大きな話題を集めました。**また島根・出雲出身で、ニューヨークで VFX/カラリスト/映像制作者として活躍している佐藤文郎氏が本作のポストプロダクション・スーパーバイザーを担当している。本作は 9/25（金）よりＴ・ジョイ出雲にて公開。**

ポストプロダクション・スーパーバイザー：佐藤文郎プロフィール

島根県出雲市(大社町)1985 年生まれ。島根県立大社高校出身。大社高校卒業後、東京の美術大学で映画制作を勉強し、卒業後、ポスト・プロダクションに勤務。その後、CM ディレクターとして活躍。2017 年に渡米、現在はニューヨークの映画制作スタジオで映画の VFX /カラリストなどとして活動中。大学在学時代から様々な映画、劇場アニメ(ナルト疾風伝、Nana)などの制作に関わる傍ら、自身の映画制作も続け、島根を舞台に制作した映画「あひる、ある日いつの日にか」は香港国際映画祭でワールドプレミア上映された。その他、「兄、行則の日記」はロッテルダム国際映画祭などでも上映。2014 年頃からは映画の国際共同制作にも関わるようになり、2016 年イラン映画界の巨匠、アミール・ナデリ監督のイタリア映画「モンテ」(伊、仏、米共同制作、19 年日本公開)に編集者として参加し、第 73 回ヴェネチア映画祭で同作は監督ばんざい賞を受賞した。本作ではポストプロダクション・スーパーバイザーとして、撮影から劇場公開までの映画の制作プロセスを主導して指揮している。

監督：山崎エマ　プロフィール

神戸生まれ。イギリス人の父と日本人の母を持ち、ニューヨークと東京を拠点とするドキュメンタリー映像監督。19 歳で渡米しニューヨーク大学映画制作学部を卒業後、エディターとして携わった作品は HBO、PBS、CNN や世界中の映画祭で放送・上映された。長編初監督作品『モンキービジネス：おさるのジョージ著者の大冒険』はクラウドファンディングで 2000 万円を集め、2017 年ロサンゼルス映画祭でワールドプレミア。日本で 2018 年劇場公開。2019 年には NHK 大河ドラマ『いだてん』の紀行番組を担当。その他、『#dearICHIRO』(Yahoo! Japan Creators Program）や『CHAYA 魂の番人～エイリー舞踊団に捧げた半生』(NHK）なども監督。日本人の心を持ちながら外国人の視点が理解できる立場を活かし、人間の葛藤や成功の姿を親密な距離で捉えるドキュメンタリー制作を目指す。

【山崎エマ（３１）『甲子園：フィールド・オブ・ドリームス』監督 コメント】

山崎エマ　2020 年 8 月

甲子園球場近くの西宮市で育った私は、映像の勉強をしに 19 歳でニューヨークに渡り、アメリカに 10 年近く滞在した。その間、海外生活ならではの経験を多くしながらも、日本社会では当たり前に電車が時間通りに動き、人々は列を作って並び、身の回りに対する一定の配慮があるが、アメリカではそれは全く「当たり前」ではないことも痛感した。そんな中、2017 年に 9 年ぶりに過ごした日本の夏。目にしたのは、街中で、居酒屋で、そして仕事の打ち合わせ先でまでも流れていた甲子園の中継映像だった。美しく並ぶヘルメット・全力の姿・チームファーストの思考。高校野球のあり方に、日本の究極の部分が詰まっている。そして、帰国後改めて目についていた日本社会の縮図に見えた。

100 回大会を控え、伝統を守りながらも時代に伴う変化が用いられた高校野球。そんな特別な年を一年追えば、高校野球のみならず、日本の歩んできた道、そしてこれから日本を考えることもできるのではないか。そして、この日本独特の文化を世界の人たちに紹介し、今持たれている日本のイメージ「スシ・アニメ・サムライ」以外に、情熱的で複雑な日本のストーリーを知ってもらいたい。そんな思いで作品制作に飛び込んだ。

全国に 4000 校近くある野球部。どんな学校を取材すれば良いのか悩んだ。浮かんだキーワードは二つ。「メジャーリーガーと繋がりがある」そして「野球がアメリカから輸入された場所横浜」。結局、様々な縁と運命が巡り、横浜隼人高校と花巻東高校を中心に取材することになった。

『甲子園』という映画なのだから、追っているチームが甲子園に出場してほしいと願いながら、どんな強いチームでも一回負ければ夏が終わるトーナメントシステム。さらには、春先から撮影している球児の運命も、メンバー争いの行方やチャンスで回ってきたときの打席の結果など、自分たちではコントロールできないことばかり。だからこそ、永遠にカメラを回し続けた。その時間延べ 300 時間。特に、球児たちが爆発する喜びの瞬間も、この上なく悔しい瞬間も、自分たちの存在がそれを影響させてはいけないという使命を持ちながら空気のようになることを目指し、あらゆる瞬間に立ち会った。その中のほんの一部だけが、作品の中に残る。

夏が終わり編集に入ると、映像から浮かび上がってきたものは球児の汗と涙だけでなく、指導者たちの情熱と葛藤だった。高校野球の主役はその一夏に全てをかける球児だが、その「一夏」を何十回経験してきた監督たちは、毎年毎年、それまでの経験を生かし、次世代を育てるという責任と向き合い、様々な期待を背負って指導を続ける。もう野球の技術という話ではなく、「人生の生き方」について、自分たちが教えられる限りのことを懸命に伝えている。それは、正解がない道。100 年の中で受け継がれてきた考え方をヒントに、自己流を足し、永遠に試行錯誤を続けるしかない。その孤独さと重圧は、本人たちにしか分からないものばかりだと感じた。

2019 年秋にニューヨークの映画祭でのワールドプレミアを経て、これから世界中に届けるべく動くはずだった 2020 年。パンデミックの影響で全てが白紙になった。そんな矢先に決まった ESPN の全米放送。コロナ でスポーツができないからこそ頂いた放送の機会だった。「ベースボールと全く違うこんな『野球』の世界があったなんて」「日本人も、感情豊かなんですね」と様々な反響が届き、甲子園のことを初めて知ったアメリカ人たちが「KOSHIEN」という英語を使って興奮し語り合う様子に感激した。

2020 年、春も夏も甲子園中止。そんな異例の年に、巨匠市川崑監督が夏の甲子園 50 回大会を捉えた名作『青春』と共に頂いた日本での公開の機会。「密」を避けないといけない時代に、懐かしく思える「密」で溢れかえっていたちょっと前の高校野球の姿。今夏の公開は、高校野球が本来の姿を取り戻すまでの「繋ぎ」の一つとして、そして今一度この日本の風物詩を見つめ考える機会として、役に立ちたいという願いもこもっている。是非、劇場で、それぞれの視点で受け止めて頂きたい。

『甲子園：フィールド・オブ・ドリームス』作品情報

2018 年、夏の甲子園は 100 回大会を迎えた。その記念すべき年の特別プロジェクトとして、米・シネリック・クリエイティブ/NHK/NHK エンタープライズで取り組んだ国際共同制作作品。主人公の**横浜隼人高校の水谷哲也監督**は、30 年近いキャリアの中でも特別な思いでこの記念すべき年に挑んでいた。水谷は、勝つことのみならず、挨拶や掃除などを徹底し人間形成を重要視。更には、**メジャーリーガー大谷翔平や菊池雄星を輩出したる花巻東高校野球部の佐々木洋監督の恩師でもある**。この作品では**この 2 人の監督の 100 回大会の年を追いながら、高校野球を日本の社会の縮図と位置づけ、変わりゆく時代を考える**。昭和から平成、そして未来へ。時代とともに変えるべきもの、変えてはならないもの…純粋に青春の全てをぶつける高校球児と、教育の最前線にたつ指導者の葛藤、そして喜びを見つめる。

クレジット

監督・編集：山崎エマ

出演：水谷哲也、佐々木洋 / 大谷翔平、菊池雄星

プロデューサー：エリック・ニアリ　エグゼクティブプロデューサー：伊藤雄介 常木佳子 安田慎

撮影監督：マイケル・クロメット 音楽：ジェイソン・カミングズ

国際共同制作：シネリック・クリエイティブ、NHK、NHKエンタープライズ　配給：シネリック・クリエイティブ　配給協力：日活

２０２０年／アメリカ・日本／９４分／１６：９カラー／５.１ch ／ドキュメンタリー　©2019 Cineric Creative/NHK/NHK Enterprises

9 月 25 日（金）より T・ジョイ出雲にて公開